

# 中国文芸研究会 2022 年度総会議案書

中国文芸研究会は、研究誌『野草』を年二回、『中国文芸研究会会報』（以下『会報』と略）を年十一回刊行し、例会を年十回開催している。さらに夏期合宿を企画し、有志による研究会も幾つか立ちあがっており、継続的に運営されている。今年度もこうした活動を中心とする研究が活発に展開されるであろう。

一方、マンパワーの不足は常態化しており、にわかに改善が見込めない。会員数は一時期右肩上がりだったが、近年では、ほぼ横ばい状態が続いている。事務局メンバーの多くが所属する大学運営のあり方も変化し、会員も年々忙しくなる一方である。

こうした情勢にあって、学会組織とは異なる民間の研究団体が、会費と純粋な研究心だけに支えられて活動を維持してゆくには、これまで以上に実質的な事務局体制の整備と、学会や研究機関の活動とは一定程度差別化された、独自の研究活動の展開が求められるだろう。本研究会は、目先の成果に縛られず、のびやかに研究をひろげ、相互交流を深めながら、じっくりと息の長い、着実な研究活動を続けることのできる場でありたいと願う。

こうした研究活動を支える経済的基盤である会費は、会員から滞りなく納入されている。

また、実際の研究活動については、以下に記すように、各セクションにおいて工夫がこらされ、活性化がはかられている。年十回の例会が、毎回 20 名程度の参加者を確保できていることもそのあらわれであろう。こうした活動を『野草』や『会報』の紙面に極力反映させ、課題を広く会員と共有し、今年も積極的に研究会の運営に努めてゆきたい。

ただ、一昨年末より流行し始めた新型コロナウイルスの影響により、昨年度の総会と例会は、すべてオンラインでの開催となった。そのため、例会の常連だった方々の姿が見えなくなったり、意志疎通がやや不十分になったりするマイナス面は避けられなかったが、一方、毎回複数の方が遠隔地から参加くださり、参加者総数が増えるというプラス面もあった。今年度も 4 月総会及びその後の例会も、暫定的にオンラインでの開催となる。総会時の講演は休止となった。

幸い、我々の研究は、本とペンとインターネットによるところが多い。健康管理には十分注意を払い、今年度も慎重かつ活発に研究活動を維持してゆきたい。

## I. 2021 年度活動報告

\*会員数は 251 名（2022 年 3 月 31 日現在）。前年度からの会員数は微増。

\*運営面では、事務局の役割分担がほぼ定着し、円滑な研究会活動が行われた。今後とも事務局体制を維持・更新してゆく人材の確保・育成が重要である。

以下、セクションごとに活動状況を報告する。

### (1) 『野草』刊行（担当：好並・濱田、大野・松浦）

\*第106・107号(2021年9月30日/編集担当:好並・濱田)を予定通り刊行した。特集はなし。特別寄稿3本、論文7本を掲載した。

\*第108号(2022年3月31日/編集担当:大野・松浦)を予定通り刊行した。特集は設けず、7本の論文を掲載した。

## (2)『会報』発行(担当:永井・三須ほか会報担当者)

\*前年に引き続き2021年度も永井英美をリーダー、三須祐介をサブリーダーとして活動し、各月担当者がそれぞれ編集作業を行った。

2021年度4月号(474号)=和田、5月号(475号)=河本、6月号(476号)=羽田、7月号(477号)=南、8月号(478号)=阿部、9月号(479号)=唐、10月号(480号)=島、11月号(481号)=小笠原、12月号(482号)=松村、1月号(483号)=池田、2021年度2月3月合併号(484、485号)=上原

\*各月とも期日どおりに出すことができた。

\*担当者は「会報担当者ML」に版下をアップし、有志でチェックしたのちに印刷に回した。

\*2014年度から「自伝・回想録を読む会」と連携を行い、同会発表者が適宜発表内容をまとめて会報に投稿してきた。16年度から「映画の会」の原稿も随時掲載するなど、いくつかの不定期の連載も頼りにしている。また21年度からはオンライン開催の「書評の会・出店」からの投稿が届くようになった。会員諸氏のおかげで、各号および年度末の合併号、ともに大変充実したものとなった。

\*「交流」欄は、事務局MLに挙がる情報などを活用した。

\*毎号編集担当者がPDFを作成し、例会終了後に会報電子版として配信した。

\*2019年度までは例会開催時に会報発送作業を行ってきた。遠方等の事情でやむを得ない場合をのぞき、各担当者が毎号発送にも立ち会い、名簿管理係などのご協力のもと、執筆者分封入などに気を配り、編集から発送までの過程に責任をもつように務めた。立ち会えない場合、会報担当者の誰かが代理をつとめてきた。しかし2020年度からはオンラインでの例会となり、紙版の会報は事務局有志のご尽力で数号分まとめて発送している。

\*会報電子版登録者は、現在のべ174名である。

\*例会報告は報告者が執筆し、発表の翌月発行の会報に掲載した。

\*会報印刷費はあらかじめ会計係からサブリーダー三須が予算を預かり、木村桂文社からの請求に応じてその都度支払った。

## (3)「例会」開催(担当:濱田)

\*前年度の4月例会もオンライン総会のみとなった。5月以降はzoom上で、合評会を含む例会をほぼ例年通りのスケジュールで進めたが、12月例会は106、107合併号の合評会となった。オンライン例会の参加者人数は把握が難しかったが、多い時は60人近く、少ない時でも30人近くの延べアクセスがあった。よくも悪くもオンライン開催に慣れてきた感がある。

## (4)「夏期合宿」(担当:大東・城山・和田・阿部沙)

\*夏期合宿は残念ながら2021年度につづき中止となった。

**(5)「映画の会」**(担当：菅原)

\*2021年度は『ユリイカ』2021年8月号「台湾映画の現在」にかんする書評会の企画があったが、参加者の調整が叶わず実現できなかった。メーリング・リスト上で外部の研究会開催などの情報交換を行った。

**(6)「自伝・回想録を読む会」**(担当：絹川・今泉・大東・中野徹)

\*20世紀の中華圏で書かれた自伝・回想録(中・英・日の各語による)を主な対象として、解題を作成することを目的に、2014年度から開始した。2019年度で例会での報告を終え、会報誌上での掲載も2021年度の第477号(2021年7月)にて終了した。

**(7)「京劇史研究会」**(担当：松浦)

\*本年度も残念ながらほとんど活動ができなかった。来年度を期したい。

**(8)「書評の会・出店」**(担当：大東・中野徹・津守)

\*本年度から「書評の会・出店」を開始した。国内外の若手を中心とする研究者が集まって書評を作成する、オンラインの研究会である。2021年6月に第1回例会を開催し、7月の第2回から、2~3名の担当者が書評の原稿を提出し、参加者が討議する形にて開催した。開催時間は主に毎月最終金曜日の夜20時から22時にかけて。2022年3月までに計9回の例会を開催し、計17冊の書籍について書評を作成した。毎回の参加者は15名~25名程度。例会の翌月以降の会報に、例会で作成した以外の書評も含め、計15篇の書評を掲載した。

**(9)「特別事業」計画**(担当：宇野木)

\*昨年度の方針を受けて、新たな「特別基金」に基づく「特別事業」制度として、「野草研究支援」制度(仮称)の新設に取り組もうとしたが、コロナ禍の影響もあり、詰め作業を進めることはできずにいる。

\*「自伝・回想録を読む会」が「野草増刊号」として『中国20世紀自伝回想録解題集』の刊行を準備しているが、これは、遅ればせではあるが「中国文芸研究会50周年記念」の一環でもあるので、「特別事業」として如何なる支援が可能かについて意見交換を進めている。

**(10)「野草ネットワーク」**(担当：青野・菅原・鳥谷・大東)

\*レンタルサーバーによる研究会のネットワーク運営を続けている。

\*4月よりWordPress版の新ウェブサイト(<https://www.c-bungei.jp/wphp/>)の試行運用を開始した。不具合等の有無を確認した後に、新サイトへの移行を完了する。旧サイト(<http://www.c-bungei.jp/>)

s://www.c-bungei.jp/bungei.shtml)はアーカイブ・サイトとして残すこととする。

\*事務局アドレス office[アットマーク]c-bungei.jp 宛のメールを事務局 ML に転送する作業は、2011 年度より菅原・鳥谷の複数担当制へと移行し、現在に至る。これにより、転送処理の相互チェックがはたらき、転送ミスや対応漏れ等を防ぐことが可能となった。

\*「野草 ML」(登録数のべ 130 件)は会員交流の場として、「事務局 ML」(登録数のべ 75 件)は運営に関わる意見交換や実務作業効率化の手段として重要な役割を果たした。

「野草 ML」は依然あまり活発ではないが、気軽な情報交換の場として、一定の活用がなされた。

\*「会報電子版配信用 ML」(登録のべ 176 件)は、コロナ禍による発送の遅滞により、登録者が増加しているが、会員数に比して依然登録数が少ない。さらに登録を呼びかけることと、アーカイブ化については、会報の送付先の一つをアーカイブ用アドレスとしているので、自動的に蓄積されている。読み出し方については、ネットワークマニュアルを作成し、事務局で共有している。

\*「交流データベース」を WordPress を利用したスタイルに変更し、登録作業を会員自身に書き込んでもらえるようになったが、ほとんど情報の書き込みがなく、会員への周知が不十分である。検索機能についても、ある程度可能であるが、まだ完全ではない。

<https://c-bungei.jp/database/> は会員でなくても書き込みが可能であるが、書き込みにはメールアドレスをネットワーク管理者が承認しなければ、書き込みが反映されない。ただし毎回の承認ではなく、一度承認されたコメントの書き込みは次回から承認を経ずに反映される。

\*『野草』第 108 号より、投稿専用のメールアドレスとして、新たに yecaobianji[アットマーク]gmail.com の運用を開始した。

## II. 2022 年度活動方針

\*事務局体制をしっかり安定させ、さらに研究活動の維持・向上に努める。

\*そのため、(1) 組織の維持管理を受け持つ会費管理・口座管理・事務局 ML、(2) 研究活動の発表や広報を受け持つ例会・会場予約・二次会予約・夏合宿・『野草』・『会報』・ウェブサイト、(3) 新しい研究活動の企画を受け持つ「映画の会」・「自伝・回想録を読む会」・「京劇史研究会」・「書評の会・出店」・特別事業が有機的に機能し、本研究会が十分に力を発揮できるよう、事務局・各セクションの役割分担を確認し、相互の連携を強めてゆきたい。

\*大学院生を中心とする若手層および関西在住以外の会員にも、主体的、積極的な参加と役割分担を呼びかけるとともに、広く会員からの積極的な提言や取り組みを歓迎したい。

\*研究活動の活性化には、例会報告や『野草』掲載論文などにおける研究水準の向上が不可欠であるが、そのためにも、これまで以上に多様な方法が試みられて良いだろう。

\*なお、今年度も、新型コロナウイルスの流行により、残念ながら zoom を用いた活動を中心とせざるをえないであろう。以下のセクションごとの活動方針も、現時点におけるもので

ある。今後の状況変化により、変更される可能性のあることをお断りしておきたい。

## 1 各種研究活動について

### (1) 『野草』刊行（文責：松浦）

\* 『野草』の刊行は、研究会の中心事業である。刊行の継続と掲載論文の質的向上は、恒常的課題である。そのため、「例会報告→『野草』掲載→例会での合評会」という基本原則を守り、それぞれに充実させることを研究会活動の骨子とする。

\* 編集担当者は、従来通り、執筆予定者との連絡を十分にとるだけでなく、独自の企画を立てる場合は、特に例会担当者との連携を密にする必要がある。

\* 編集担当者は「『野草』編集の手引き」を活用し、締切りを厳守することにより、投稿原稿の審査（査読）や版下作成を含む全ての編集作業が円滑に進むように努める。

\* 「『野草』編集の手引き」の現状を踏まえた改訂に着手する。

\* 今年度も『野草』編集に関わる中・長期的な計画に基づき、編集担当者を決め、十分な余裕を持って編集作業が行えるよう努めなければならない。

\* 今後の刊行計画は以下の通りである。

・第109号＝2022年3月末原稿提出〆切、2022年10月1日刊行。編集：張文菁〔サポート藤野真子〕。

・第110号＝2022年9月末原稿提出〆切、2023年3月31日刊行。編集：和田知久〔サポート大東和重〕。

・第111号＝2023年3月末原稿提出〆切、2023年10月1日刊行。編集：城山拓也〔サポート〕

・第112号＝2023年9月末原稿提出〆切、2024年3月31日刊行。編集：高橋俊〔サポート〕

・第113号＝2024年3月末原稿提出〆切、2024年10月1日刊行。編集：（田中雄大？）

・第114号＝2024年9月末原稿提出〆切、2025年3月31日刊行。編集：福長悠〔サポート〕

\* 『野草』第109号編集委員会は、大野陽介、松浦恆雄、張文菁、藤野真子、和田知久、大東和重。

\* 『野草』第110号以降の編集委員会は、未定。

\* 『野草』の書店への卸作業、海外送付先への発送作業は、好並晶・中野徹の担当とする。

### (2) 『会報』発行（担当：永井・三須ほか、会報担当者）

<編集について>

\* 昨年度同様、永井英美をリーダー、三須祐介をサブリーダーとして、各月担当者が編集作業にあたる。

\* 原則として毎号12頁（原稿が十分にある場合は最大20頁）、3月末発行の2月3月合併号は

24 頁以内とする。

\*版下完成後、事務局 ML に目次を送信する。その際、「繰り越し原稿が○本ある/ない」という情報をわかりやすく書く。

\*原稿募集の広告を載せる際、「原則として締切を毎月末とします。ただし原稿多数の場合、次号おくりになることもあることをご了承ください」という文言も入れる。

☆原稿は 2 号(2 ヶ月)以上先送りしない。20 頁以内でも対応できない場合、編集担当者は、会報担当者 ML で相談する。

\*原稿の依頼・採否等は編集担当者の裁量で行なうが、必要と考えた場合、リーダー、サブリーダーに相談し、最終的に事務局の判断に委ねることもできる。

\*今後の編集担当は、以下の予定である。

2022 年度 4 月号(486 号)=大野、5 月号(487 号)=田村、6 月号(488 号)=津守、7 月号(489 号)=中野、8 月号(490 号)=小川、9 月号(491 号)=宋、10 月号(492 号)=福長、11 月号(493 号)=田中、12 月号(494 号)=豊田、1 月号(495 号)=島、2 月 3 月合併号(496/497 号)=池田、

(以下、参考)2023 年度 4 月号(498 号)=河本、5 月号(499 号)=羽田、6 月 7 月 8 月 9 月 10 月号=500 期記念号(500~504 号)=全員、11 月号(505 号)=唐、12 月号(506 号)=和田、1 月号(507 号)=小笠原、2023 年度 2 月 3 月合併号(508、509 号)=津守、2024 年 4 月号(510 号)=松村、5 月号(511 号)=上原、6 月号(512 号)=南、10 月号(513 号)=阿部、～～

2024 年度 2 月 3 月合併号=唐、2025 年度 2 月 3 月合併号=松村、2026 年度 2 月 3 月合併号=小川、2027 年度 2 月 3 月合併号=宋、2028 年度 2 月 3 月合併号=福長、2029 年度 2 月 3 月合併号=田中

\*永井は全体の統括と校正などを、三須は会計とメーリングリストの管理を担当する。両者とも必要があれば随時ピンチヒッターとして編集を担当する。

\*例会のない 2 月は発行を行わず、3 月末に 2 月 3 月合併号を発行する。これまで中野、三須、大野、阿部、永井、和田、河本、島、豊田、上原が担当してきた。今年度は池田が編集を担当する。

<記事内容について>

\*引き続き内容の充実と活性化を図ってゆく。

\*「例会記録」は原則として 800 字～1000 字をめどに例会報告者が執筆する。ただし講演や書評が行われる場合、あらかじめ記録者を決めておく。

<会報電子版について>

\*会報紙媒体版と電子版の 2 本立てで発行する。会報電子版の運営は大東が行い、PDF ファイルの作成と配信は各月の編集担当者が行う。

<投稿について>

\*【原稿送付先】office[アットマーク]c-bungei.jp

\*投稿は原則として e-mail 添付とし、画像は印刷費削減のため、版下データに埋め込む。

\*投稿の際、「中国文芸研究会会報」の原稿であることを明記する。締め切りは毎月末である。繰り越し原稿や先着原稿が多く 20 頁を超える場合は、締め切り前に届いてもやむをえず次号送りにすることがある。その場合次号で必ず掲載する。(上記☆参照)

\*二重投稿原稿は受理しない。また投稿は原則として完成稿とし、著者校正は行わない。

<「反響」について>

\*記事に対する読後感やご意見をぜひお寄せいただきたい。前年度に引き続き係でも会報メルマガ送信時、文章に「ご感想をぜひこちらまで」などの文言とメールアドレスを入れるなどの対策を行う。

<発送について>

\*今後対面での例会が復活した場合は、従来どおり、例会開始時刻 13 時から約 30～40 分をかけて係と例会出席者が協力して発送作業を行う。担当者は原則として編集から発送までの責任を負うこととし、担当月の会報を発送するときに立ち会い、名簿管理者の協力を得ながら執筆者分の封入、残部処理の確認などを行う。急用や遠方などのため立ち会えない場合、例会に出席できる担当者がその代理をする。

\*発送にはクロネコヤマト DM 便を使用する。大阪会場は大野、京都会場は永井がヤマト運輸に集荷依頼を担当する。京都では主に唐が封筒・糊などの消耗品や発送に必要なグッズを保管し、会場へ持参する。(ただし 8 月号が夏合宿において発送される場合は、都合の良い方法で発送する)

\*例会がオンラインの場合は、会報電子版のみ期日に配信する。紙版は印刷後、主に近畿大学中野研究室で保管し、適当な折をみて有志で発送作業を行う予定である。

\*海外発送は『野草』刊行とあわせて年 2 回とする。海外発送は好並晶・中野徹が担当する。海外への発送は原則として PDF 送付とする。

<会計について>

\*会報印刷費、封筒代などは、あらかじめサブリーダー(三須)が気づかり、年度末に会計との間で清算をおこなう。

\*担当者が立て替えをした場合、その都度領収書をサブリーダーに渡して清算する。

<係の仕事などについて>

\*投稿が少なめで担当者が苦慮することも多かったが、昨年度から「書評の会・出店」のメンバーによる活発な投稿があり、大変ありがたい。今後とも会員諸氏の活発な投稿をぜひお願いしたい。「映画の会」「京劇史研究会」からの投稿も期待している。今後も会報活性化に向けてさまざまなアイデアをいただきたい。反響も広く募集している。

\*会報係は大勢の担当者が分担して仕事をする、という点が、ほかの係と異なっている。各地に散らばりそれぞれ多忙な担当者が、話し合ったり共通認識をもったりすることは容易ではないが、会報担当者 ML、zoom による担当者会議などを利用して随時意見交換を行い、係としての責任を果たしてゆきたい。

### (3) 「例会」開催 (担当：濱田)

\*「例会」開催数は、年間10回とする（2月、8月は例会を行わない）。今年も当面はオンライン開催とせざるを得ないが、会場を借りる目処が立ち次第対面に移行したいので、ウェブサイトには随時注目していただきたい。オンラインが続く限り、各月の最終日曜日午後1:30よりzoomで開会する。

zoom開催の利点は自宅から繋げるので遠方のオーディエンスが増えたことであり、欠点は対面で出席していたのに参加しない（できない）会員が相当数いたことだったが、長年のリモート生活の成果か、従来の対面参加者がオンラインに（部分的に）参加して下さることが増えた。早期の対面開催を目指すことは変わらないが、対面に移行した際、部分的にでも（たとえば合評会など）にハイブリッド開催を考えるべき時期が来ている。

\*講演（会員外・他領域・外国人研究者などを含む）・書評を年間各1回程度、『野草』関連報告を随時組み入れる。なお、『野草』合評会は2016年下半期から十一月（及び翌年五月）に行うこととした（105号の合評は2021年1月に行った）が、2021-2年は十二月および六月となった。合評の討論内容は、次号の『野草』誌上の合評記に反映する。原則として、論文執筆者は合評会に出席することとする。

\*「例会」担当は濱田麻矢（office[アットマーク]c-bungei.jp）とし、例会の企画と報告希望者の調整を行う。申し込む時には必ずタイトルを知らせること（タイトルに変更がある場合は報告月の前々月末までに再度濱田に知らせる）。オンライン開催の場合、例会三日前までに資料の電子データをzoom用MLに送付していただきたい。

\*今年の例会も当面はzoomで行う。URLについてはメーリングリストなどで通知済みで、公開にはしない（リンクは固定）。

\*現時点での「例会」内容（例会カレンダー）は以下の通り。後期については日程のみ記した。遠隔か対面かについては随時HPを参照していただきたい。なお、現段階では全てオンラインで開催予定。

5月29日

濱田麻矢○21世紀の祥林嫂

6月26日

『野草』108号合評会

7月31日

宋元祺○日本統治期における台湾人の大陸経験—戦前の広州を中心に

閻瑜○中島敦「北方行」と郭沫若の初期恋愛小説

8月 不開催

9月25日

王晴○脱歴史化された満洲国と伝統の継承の「あいだ」——爵青の歴史小説を中心に

10月30日

史雨○張資平『飛絮』と池田小菊『帰る日』の比較研究

11月27日

『野草』109合併号合評会（予定）

12月25日（日程未定）書評

1月29日

2月 不開催

3月26日

**（4）「夏期合宿」**（担当：大東・城山・和田・阿部沙）

\*2022年度については、状況を見ながら開催の可否を検討しているが、現状では規模を縮小しての開催を予定している。

**（5）「映画の会」**（担当：菅原）

\*今年度も、東アジア映画研究関連書籍やイベント等の話題に目をむけつつ、映画の会の活動を、『野草』をはじめとする文芸研の諸活動に有機的に結びつけていけるよう、模索する。

**（6）「自伝・回想録を読む会」**（担当：絹川・今泉・大東・中野徹）

\*現在、『野草増刊号 中国20世紀自伝回想録解題集』（仮）の編集を、大東・中野徹が担当して進めている。中国文芸研究会50周年記念事業として、2022年度中に刊行の見込みである。

**（7）「京劇史研究会」**（担当：松浦）

\*当面はzoomなどを用いた研究会の開催をめざす。第2回戯単国際シンポジウム（2023年夏に延期）を視野に入れた活動を展開したい。会での報告内容は、『会報』などを利用し公

開するよう努める。具体的な活動内容については、『会報』またはウェブサイトを確認していただきたい。

**(8)「書評の会・出店」**(担当:大東・中野徹・津守)

\* 本年は 10 回程度の例会を開催し、20 編程度の書評を会報に掲載する予定である。

**(9)「特別事業」計画**(担当:宇野木)

\* 従来の方角性を受けて、「特別基金」に基づく「特別事業」として「野草研究支援」制度(仮称)の新設に取り組む。制度の大枠は、(1)会員(個人または複数)が実現したい研究企画(出版・プロジェクト研究など)に対する支援制度、(2)数年(3~5年)に1件程度の割合で実施、(3)支援資金額は最大で50万円程度、(4)運営・審査などは「野草研究支援制度運営委員会(仮)」が担う、というのが現在の到達点である。なお、その際には、この間、話題に上がった「野草叢書」構想や『野草』バックナンバーのweb公開作業なども視野に入れることが確認されている。

\* 「野草増刊号」として刊行する『中国20世紀自伝回想録解題集』は「中国文芸研究会50周年記念」事業の一環でもあるため、「特別事業」としても必要な支援を検討する。

\* その他、研究会全体として位置づけて取り組む研究事業が合意された際には、「特別事業」としての支援を進めていく。

**(10)「野草ネットワーク」**(担当:青野・菅原・鳥谷・大東)

\* コンピュータ・ネットワークを利用した『会報』『野草』編集作業の効率化は定着した。コンピュータ・ネットワークは事務の効率化に留まらず、遠隔地との交流や種々の情報提供・発信手段として、不可欠のものである。レンタルサーバーによる運営も定着したので、新たな展開が期待される。

\* 『野草』掲載論文の検索を始め、本研究会に関する様々な情報を発信している「中国文芸研究会ウェブサイト」(<https://www.c-bungei.jp/wphp/>)を、さらに充実させていく。

\* 設置された「交流データベース」(<http://c-bungei.jp/database/>)と事務局 ML の連携がうまくゆくようにするために、事務局 ML に掲載された交流情報を、データベースに登録する担当者をきめる、あるいは、ML に情報提供すると同時に、提供者がコメント機能を使って投稿する形で、データベースにも書き込むようにする、などの工夫をする。会員の皆さんが、著書や論文を発表された場合は、この「交流データベース」に情報を投稿していただければ幸いである。セキュリティのため最初の登録は名前(ニックネーム可)が認証されるのを待つ必要があるが、認証されれば、次回の投稿から同じ「名前」であれば、その手続きが省略される。投稿されたデータを検索する機能もあるが、検索機能の充実を今後の課題とする。

\* 「野草 ML」(加入手続=事務局までメールでアドレスを知らせること。手続が完了する

と担当者からそのアドレスに通知がなされる)を活用した会員間の交流にも期待したい。

\*事務局アドレス宛のメールを事務局MLに転送する作業は、前年度に引き続き、菅原・鳥谷の複数担当制で行う。

\*投稿用メール・アカウント yecaobianji[アットマーク]gmail.com による送受信を編集担当者・メール転送担当者で共有・共同管理する。

\*サーバー管理の手順をマニュアル化し、事務局で共有する。

## 2 運営体制について

\*研究会の運営は、事務局と『野草』編集委員会によって行う。

### (1) 事務局

\*事務局は、総会決定に基づき研究会活動の日常的な実務を担当する。事務局構成メンバーと担当は以下の通り。

青野繁治(『野草』編集顧問)・阿部沙織(会報、夏期合宿)・阿部範之(京都会場予約、名簿管理)・池田智恵(会報)・今泉秀人(『野草』編集常任)・上原かおり(会報)・宇野木洋(特別事業)・大東和重(夏期合宿、会場予約、普通口座管理補助、ML管理、『野草』第110号編集補助、自伝・回想録を読む会、書評の会・出店)・大野陽介(メール便大阪、会報、大阪会場二次会予約)・小笠原淳(会報)・小川主税(会報)・河本美紀(会報)・北岡正子(代表、『野草』編集常任)・絹川浩敏(『野草』編集常任)・工藤貴正(『野草』編集常任)・黄英哲(海外交流)・斎藤敏康(『野草』編集常任)・島由子(会報)・城山拓也(『野草』111号編集担当、夏期合宿)・菅原慶乃(映画の会、ウェブサイト管理、外部メールのML転送・会場予約)・宋新亜(会報)・田中雄大(会報)・谷行博(『野草』編集常任)・田村容子(会報)・張文菁(『野草』第109号編集担当)・津守陽(会報、書評の会・出店)・唐顥芸(会報)・鳥谷まゆみ(外部メールのML転送)・豊田周子(会報)・永井英美(会報編集リーダー、メール便京都、京都二次会予約)・中野徹(会報、海外補助、書店補助、自伝・回想録を読む会、書評の会・出店)・羽田朝子(会報)・濱田麻矢(例会)・福長悠(会報)・福家道信(『野草』編集常任)・藤野真子(会費、名簿管理、振替口座、『野草』第109号編集担当)・松浦恆雄(京劇史研究会、事務局長)・松村志乃(会報)・三須祐介(会報サブリーダー、普通口座管理、京都二次会予約)・南真理(会報)・弓削俊洋(『野草』編集常任)・好並晶(海外、書店卸し)・和田知久(『野草』第110号編集担当、会報、夏期合宿)

\*事務局の住所は以下の通り。

〒662-8501 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155

関西学院大学商学部藤野研究室気付

### (2) 『野草』編集委員会

\*『野草』編集委員会は、常任委員(『野草』編集担当経験者など)及び編集担当が事務局構成員を中心とする会員から選出した編集委員若干名により構成される。

\*『野草』編集委員会は、『野草』の編集と刊行に責任を持ち、投稿論文の査読を手配する。

また「原稿審査（査読）」のあり方、『野草』の編集・投稿規程の策定などを含む中・長期的な課題について検討する。

\* 『野草』編集委員会は、編集担当が必要に応じ事務局と相談し招集する。

\* 昨年度に引き続き、今年度中に『野草』編集委員会のあり方について方向性を出すよう検討する。

### **（３）会計監査**

\* 財政の健全な執行を図るべく会計監査を置く。会計監査は小川利康とする。